

## 一般講演Ⅳ

座長：岡田 弘（獨協医科大学埼玉医療センター）

### Ⅳ 五淋散の使用経験（最近の80例から）

小松泌尿器科

小松 歩

五淋散は、熱淋に対する代表薬である八正散（和剂局方）の加減方とされ、清熱・利水・活血・止痛の効能を持つ。（現在の五淋散の出典は古今医鑑である。）また、処方構成が、竜胆瀉肝湯、猪苓湯合四物湯に類似するため、多くの文献では、その使用対象は、猪苓湯合四物湯に類似し、それよりはやや急性期で、猪苓湯単独よりはやや慢性期に、また竜胆瀉肝湯ほど炎症は強くなく、清心蓮子飲ほど慢性的でもないと言われる。

しかし、その使用方法は、和剂局方によれば、「腎気虚のため湿熱が下注し、膀胱の気化作用が順行に行われない場合、湿熱が下焦につもり膀胱に鬱熱する場合を目標とし、排尿困難があり、尿がしたり落ちるようになり一回排尿量が少ないが、頻尿になり、臍周囲から腹部が差し込むように痛み、膀胱に尿がたまりすぎてしまうことがあるなどが、疲れがたまったときに発症するのを治す。」とされ、現在、言うところの、急性膀胱炎・急性尿道炎の処方と考えられる。また、中医学的には尿路系炎症性に対するファーストチョイスとされる方剤であり、慣れてみると、非常に使用しやすく有効である。

今回、2017年1月～8月までに五淋散を使用した80例を検討した。

その内訳は、急性膀胱炎（に最初から使用した）例が42例、急性膀胱炎の治癒後長引いた症状7例、急性細菌性前立腺炎5例、急性尿道炎9例（淋菌性尿道炎・クラミジア尿道炎各1例を含む）排尿痛8例、尿道痛1例、膀胱部痛1例、頻尿・残尿感1例、バルーンカテーテルの刺激1例、慢性前立腺炎1例、冷えると外尿道口が痛む1例、頻回に繰り返す膀胱炎2例である。

今回、各症例を検討し、各疾患・症状における代表的な症例を提示するとともに、使用方法を検討し、若干の文献的考察を含めて報告する。

五淋散が、虚証から実証まで、幅広くファーストチョイスに使用できる有効な方剤であることを示したい。